

## 神話から見た幻影：情報時代に対するキリスト教的批評

東海大学大学院研究員 近藤喜重郎

はじめに

1997年にオーストラリアで開催されたロシア正教青年大会で、在外ロシア正教会司祭グリゴリイ・ナウメンコは次のように述べた。

「われわれは情報の時代に暮らし、ほとんど止まることなく情報攻めにあっています。これはいいことでしょうか？ 役に立つことでしょうか？」(Naumenko, p.6)

この発言の中でナウメンコは、われわれの暮らす時代を「情報の時代」という。この表現は、現代文明の所産の一つである高度情報化を示す肯定的な意味合いを込めて使われる一方で、ナウメンコのこの問いかけが示すように、そこで大量に提供される情報に人々が翻弄される危険性という、否定的な意味合いも込められる。それは、後で触れるように、情報が常に真実であるという訳ではなく、その獲得は時として害になるという情報の持つ二つの側面を言い表している。

この問題をここで、しかもロシア正教会司祭の言葉を借りて取り上げる理由について略述したい。

かつてソシュールが、言語におけるシニフィエとシニフィアンを区別したように、「情報」という概念は、それがわれわれに与えられた場合、与えられた意味そのものと意味を媒介するものとを区別して考えさせる。このような見えるものと見てのものとの区別に基づいて、それぞれを別個に考察するという方法の起源は、かつて、自然現象に神意を見なくなった西洋の近代人の風潮にまで溯ることができると思われる。

このような世俗主義的世界観が成立するためには、自然の解釈に自由が認められなければならない。しかし、これを認めることは、世界の解釈を専有していたキリスト教会の特権を教会が放棄することになる。この様子をブローデルはその著『文明の文法』の中でこう述べている。西洋の「キリスト教は自由主義に対して反芻したわけだが、ついにそれに順応していったように思われるのである」(ブローデル, p.229) という。

そして、これを経過したヨーロッパで、近代文明が成立し現代文明を育んだのである。

このように見てくると、西洋のキリスト教と近代科学の無神論的世界観とは、西洋人の精神の中で、絶妙な棲み分けを行っていると思われる。

これに対してブローデルは、このような「順応」も「棲み分け」もできていないキリスト教会として、ロシア正教会をあげる。彼は、「前キリスト教期の信仰や心性」が「つねにロシアのキリスト教に陰に陽に影響を与えてきた」という。同じことは西洋のキリスト教にもいえ、もしそうであれば、西洋のキリスト教に影響を与えたものの一つに世俗主義が認められよう。

このような次第から、情報の「情報」化の起源に世俗化の果たした役割を認め、その問題点を検討するにあたり、その視点として、キリスト教を、それも「近代化」したキリスト教ではなく、「近代化」以前のキリスト教を採用したのである。

なお、ここで引用した資料のうちロシア語のものは、近藤が翻訳したものであること、印刷所の都合を考慮してロシア語の表記を英語のアルファベットにしたことを明記しておく。

## 1. 欲望に振り回される人々

ナウメンコは、その報告の中で、現代社会について述べる前提として、多くの人々が欲望に振り回されている様を描くために、今世紀に出現した大富豪の一人ジョージ・イストメンを引き合いに出す。

例：ジョージ・イストメン (Naumenko, p.2)

1888年に写真会社を設立

1927年にはアメリカ合衆国の写真業界を独占、大富豪になる

ありとあらゆる欲望を実現：蓄財、旅行、数多くの趣味、派手な女性関係など

ここで述べられたイストメンの生涯は、一見、社会的に成功した人物が道徳的に退廃していった、あるいはそもそも彼が持っていた欲望が社会的な成功後に現れた典型的な例であるように思われる。しかし、ナウメンコは、この例が程度の違いでわれわれにもあてはまるという。

「彼は悪い人間ではありません。(中略)ドストエフスキイがその小説『悪霊』で正確に記述したことが、彼に起きたのです。ドストエフスキイがいうには、物質主義者が喜びを知るのは、ただ物質的なものと満足感とに結びついた欲求と探求だけからであります。彼らが自分の目的を達成し、現実に望んだものを手に入れる時、彼らの喜びは速やかに消え失せ、彼らは、自分たちの努力を新しい欲求の実現に向けるのです。本当にそうではありませんか？私たちが人生のひとつときにあれほど強く欲し、今やガレージなどでゴミになっている物凄い数のモノを考えると、私たちは、どれほどドストエフスキイが正しかったかを納得するのです。」

ナウメンコに従えば、イストメンは物質的な成功を追求し、その点はわれわれも共通するのである。彼はその面での成功者といえよう。しかし、イストメンが1932年3月14日の朝、書齋で自殺したことは、その人生の帰結として問題となる。この問いをナウメンコは次のように述べる。

「富も名声も社会的地位も持つ人をして、どう見ても精神を病んではいなかった人をして、何かがその生涯を終わらせたのでしょうか？」(Naumenko, p.3)

この問いは、人の欲求が物質的な富、名声、社会的地位のみを対象にしているわけではない

と同時に、その対象は物質的には獲得し得ないものであることも示唆している。その原因をナウメンコはこう述べる。

「一見、これには多くの原因があるように見えます。しかし、それらの状態を誠実に見れば、原因は本質的に同一であることが分かります。簡単に言えば、私たちは皆、創造者との完全な統一のうちに暮らし、その神の栄光を分かち合うために、主によって造られたということです。もし私たちの生活に神がないのなら、霊的な空白が造られるでしょう。私たちは、様々な方法でそれを埋めようと努力するでしょうが、それにもかかわらず、何も私たちに喜ばせることはできません。」(Naumenko, p.3)

ナウメンコの解釈は聖書に基づいている。ここでいう「霊的な空白」は、「神の不在」の結果であり、これを認めるなら、世俗化された社会で「霊的な空白」が生じるのは自然である。したがって、これを埋め合わせるための何かが、世俗社会では必要となる。これについてナウメンコがこう述べる。なお、ナウメンコが属する在外教会では、世俗主義が圧倒的に優勢である点を現代社会の主な特徴とみなしている。

「私たちは皆、現代人が霊的な空白を埋めようとする手段を知っています。ある人は酒に、またある人は麻薬に、さらにある人は肉体的な飲びや淫蕩に、またある人は物質的恩恵の追求に走ります。おそらく皆さんは聞いたことがあるでしょう。中産階級のアメリカ人が、自分の気分を高めるために「買物」に出掛けることを。多くの人がうつ病と戦い、仕事を過度に負い、いわゆる仕事中毒と呼ばれるようになりました。」(Naumenko, p.4)

ナウメンコのいう「霊的な空白」は「精神的虚無感」と言い換えることができよう。これらの「霊的な空白を生めようとする手段」に没頭した人の多くは精神科医の世話になるからである。イストメンの例を考慮すると、これらの手段は、問題を解消できないと思われる。このように見ると、現代社会においても宗教が不用になったわけではないことを主張するために精神的虚無感の存在が指摘されている。彼は宗教の必要性について、護教的な立場から次のように述べる。

「もし人が主に立ち返らないなら（正教の用語でこれを痛解（告解、懺悔）と呼びます）、私たちが、もし神に立ち返らないなら、私たちが支配するのは絶望と憂鬱です。これらはしばしば自殺をもたらします。言い換えると、霊的に死ぬ時、人は、肉体的にも同じ状態に論理的には見えるのです。」(Naumenko, p.4)

もしナウメンコに同意するなら、人間は様々な欲望を持つが、その究極の対象は神であること、したがって人は神とそれに立ちかえるための方法としての宗教とを必要としていること、世俗主義が人間から宗教を取り払った結果、多くの人に精神的な虚無感が生じ、最悪の場合、

自殺をもたらしていること、がいえよう。

この状態に、新しい時代が新しい問題をもたらしたとナウメンコはいう。次に、それについて検討しよう。

## 2. 情報による感覚の過負荷

人の精神を病む背景となっている世俗化された現代社会は、冒頭で述べたように、高度情報化社会を形成しようとしている。この社会の問題を、ナウメンコは、「情報による感覚の過負荷」と呼ぶ。この問題を説明するために、ナウメンコは、架空の人物、ジョン・スミス的一天について述べる。彼の一日は次のようである。

ラジオのタイマーで定刻に流れるニュースで目覚め、朝食では新聞を読み、テレビをつけ、電子メールを確認する。通勤時の車内では、ラジオのニュースが流れ、オフィスにつくと、そこでもラジオのニュースが流れている。休憩時間には、ラジオから音楽が流れ、新聞を眺める。帰宅すると夕刊に目を通す。夕食ではテレビでドラマやニュース、娯楽番組が放映される。夜になると、コンピュータ・ゲームに興じるが、その中では常に殺したり殺されたりするものが人気を博している。入浴時には、防水加工のラジオ、あるいはテレビを風呂場に持ち込む。就寝時には、スリープ機能付きのラジオで眠り付くまでラジオを聞き、翌朝またラジオのニュースで目覚める。(Naumenko, p.5)

この例は、高度情報社会に暮らす個人に対して常に情報が提供されている様子を示している。ナウメンコは、上述のように、この様子を「情報攻め」と呼んで問題視する。この問題点をナウメンコは次のように表現する。

「主はわれわれに真実に対する渴望をお与えになりました。しかし、多くの神の恵みとともに、私たちは、この渴望を情報に対する熱情に代えてしまい、失ってしまいました。」

(Naumenko, p.6)

「情報攻め」にさらされた結果、人々の志向するものが変化してしまったとナウメンコは言う。ジョン・スミスの例は、彼に一方的かつ強制的に情報が提供されているわけではなく、彼自身が選択して情報を確認していることを示している。ここでナウメンコが「情報」に「真実」を対置した点に注目したい。上述した欲望の物質的対象と精神的対象の対置に共通し、この共通の差異が問題となるからである。

そこで、次に、彼にしたがって、これらの概念の相違点について検討しよう。

## 3. 概念の比較：情報、知識、真実、そして知恵

すでに見てきたように、ナウメンコは、大量の情報の供給が人間にとって必ずしも有益ではないとし、これを説明するために、情報と知識、真実に「知恵」を加え、これらの関係と相違点について解釈する。さらにこれらの世俗的な意味合いを「アメリカ文学辞典の定義に従って (po opredeleniyu amerikanskago literaturnogo slovarya)」引用し、キリスト教的観点と対比する。しかし、この辞典が何か、彼のテキストには具体的に示されていない。

情報：「記録あるいは資料の類概念」(Naumenko, p.7)

この定義にナウメンコは同意し、その例として電話帳をあげる。電話帳は情報のセットである。しかし、そこに含まれる情報すべてを記憶する必要はなく、かえってそれは脳にとって余計な負担となることから、「すべての情報が必要で有用であるわけではなく」、「情報の充満は、単に注意を逸らし、あるいは阻害さえもする」と指摘し、このことから、「この情報を知恵、あるいは知識とさえも呼ばない」と情報を知恵や知識から区別する。次に情報から区別された知識についてみてみよう。

知識：「知覚された、開かれた、あるいは習得されたものの総計、あるいは総体」

(Naumenko, p.7)

ナウメンコはこの定義を不完全なもののみなしている。知識を有用なものと有害なものに区別していないからである。これに対し、キリスト教会では、善の知識と悪の知識を常に区別しているという。この区別の必要性を、彼は聖書にある創造後の墮罪について言及して説明する。聖書に基づいてみれば、現代の退廃もこの墮罪の結果である。この墮罪は、「善悪を知る木」からとって食べたアダムとエバの、その一連の行為を指して言うが、この二人は、楽園で神に与えられたたった一つの戒めを破った。この過程できっかけを作ったのはヘビであるが、ナウメンコは、それよりも人の持つ好奇心こそが墮罪において大きな役割を果たしたという。好奇心が満たされたアダムとエバは楽園から追放された。では、彼らは何を知ったのか。これについてナウメンコは、聖イオアン・ズラトウストを引用している。

「(中略) 実際にこの木からとって食べたことでアダムはどんな知識を得たのか?彼が知ったのは、神への聴従が善で不服従が悪だということだ。まさにこれが善悪を知るということで、それ以上の何物でもない。」(Naumenko, p.8)

アダムとエバは善悪を知ったが、これを知るということは、神の戒めを破るということであった。この場合、知識の獲得は、悪、あるいは罪と同義であった。このことから、ナウメンコは「すべての知識が必要で有用ではなく」、「反対にその多くは有害であり、毒物と同一視される」と断定する。

そして、このような区分が世俗の概念に含まれていないという先の指摘に関連して、彼は信

仰と知識との関係について、世俗主義とキリスト教とを対比する。ここでは、世俗主義の代表にヒューマニズムが選ばれている。

「・・・ヒューマニズムが私たちに説くには、人はただ己個人の努力と知識と経験によるのみ、真実の知識を獲得できます。しかし、常に私たちの高慢さを押さえてきた教会の教えは反対です。ソロモン王は率直にこう言っています：「深い知恵の始まりは主への恐れである」と。」  
(Naumenko, p.9)

ここで述べられたように、世俗主義的思考は、「真実の知識」の獲得の条件から信仰を除外するが、キリスト教観点からすると、「深い知恵」と信仰との間には密接な関連性がある。この点について、ナウメンコは、在外教会の護教家アンドレーエフを引用して補足する。

「信仰と知識は、その本質そのものにしたがって、互いに不可分である。信仰する者が己の信仰の対象について考えず、自分が誰を信仰するかを知らないことはありえない。哲学者も研究者も、研究しながら、少なくとも、自分の理性を信じないことはありえない。

宗教にとっての知識は、科学にとっての信仰と同様に不可欠で然るべきものである。信仰は知識が不十分で無力なところで必要とされることができる。信仰によって知られたことは、知識と矛盾することができない。現実には、この矛盾はよく想像上のものであったりする。キリスト教の護教学は、この想像上の矛盾の総合を行うことである。

(中略)

宗教は、人の霊という、より高度で複雑な問題に答えるが、この問いに答えるに科学は無力である。宗教がより高度に発達するにつれて、その宗教は知識への愛を育てる。もちろん、その知識とは空虚なものではなく、真実のものであり、霊的な知恵と呼ばれる。」

(Naumenko, p.10)

ここでアンドレーエフは、信仰と知識とが、個人の精神の中で不可分であり、相互に制御的でなければならないこと、知識は個人の「信仰」と矛盾なく獲得されるとき、「真実のもの」となると述べている。またこの過程の中で発生する問いについて、ナウメンコは、次のように述べている。

「個々の理性ある、通常の、批判的にものを考える人間は、霊的な発達の過程で、遅かれ早かれ、真実（真理）の定義と結びついた一連の問いを自らに課し始めます：個人と宇宙の生命には、どのような性質、意味、目的があるのか？生命とは何か？すべての存在はどのようにして発生したのか？神、全存在の創造者はいるのか、あるいは創造者なしに世界は存在するのか？（中略）完全な真理を知ることは可能か？如何に暮らすべきか？何を志すべきか？

様々な形をとるこれらの問いは、通常の、ものを考える個々人が己に課すべきであります。（中略）これらの問いが発し、検討され、解決されるには時間が必要です。個々人は、個人的

にこの過程を通過する必要がありますが、あるいは彼は人として成長できず、靈的に心理的にショックを受けるでしょう。」(Naumenko, p.12)

ここでナウメンコのいう「ショック」は、「問いが発し、検討され、解決される」過程で、問いをめぐる知識と「信仰」とが矛盾し、上述の相互制御機能がうまく働かなかった結果と考えられる。上述のアンドレーエフの引用を考慮すると、「信仰」が未熟な場合に、このような「ショック」を受けるといえる。

こうして、現代人の精神的な問題の一つが、知識と「信仰」の相互制御にあること、そのためには時間が必要であることが判明した。このように見てくると、「情報の時代」に対するナウメンコの問いかけは、次のように明瞭になる。

「われわれの高度情報化時代に、少年期から私たちは情報による感覚の過負荷にさらされており、こう問うべきでありましょう:私たちに時間は十分ありますか?これらの重大な問いが若い人の精神に生じるために、彼らが解決できることを問わないとして、十分な配慮が払われていますか?まさにこの原因によって、私たちは、出来損ないの社会になったのであり、あるデータによると、5人に2人が精神的に病んでいるのでしょ。」(Naumenko, p.12)

ナウメンコは、社会が課す時間の流れとその中で暮らす個人々の精神的な発達との間のズレを問題にしている。ここでは、個人に対して与えられている時間の量が問題となっており同時に、与えられた時間の使い方、ものの考え方が問題になっている。情報を、その内容に有用と有害の区分をせずに、大量に供給する高度情報化社会は、この問題を悪化させているというのである。ナウメンコのこの問いは世俗社会に対するキリスト教徒からの問いかけでもある。しかし彼はその後で、世俗主義について直接触れることはない。そこで、次に、キリスト教的観点から見た世俗主義について、ナウメンコと同じ在外ロシア正教会の司祭アナトリー・トレパチコの「キリスト教と世俗主義」から見てみよう。

#### 4. 神の創造と世俗主義：神話から見た幻影

「キリスト教と世俗主義」の著者トレパチコは、現代社会は、自然に物質の特性のみを見る近代科学の発達に伴い、今の発展を獲得したと述べる。このような世俗主義を、とりわけ現代のそれをトレパチコは次のように述べる。「19世紀からこの用語は、宗教および教会からの「開放」のあらゆる形態を意味するように」なったという。上述のように、この「開放」の中に、世界観の世俗化も含まれる。このような自然現象に神意を見ない世俗主義を、トレパチコは『ファウスト』に出てくるメフィストフェレスの次の言葉に見る。

「すでに数千年もの間、この硬い食事を咀嚼し続けて知っていることといえば、誰一人、揺り籠から棺桶までの間に、この古くて酸いパンをこなせるものはいないということです。」

(Trepachko, p.2、「ファウスト」の原文では1775-1780行の間)

この言葉は、世界の意味と目的を知ろうとするファウストに対して、それらは神以外の誰にも分からず、これを問うことは無意味で無駄骨に終わるとそそのかした時のものである。これをトレパチコは、「自然の中に善なるものも、善なる目的への志向」も認めないものとし、もしこれに同意するなら、神意に背くという。世界の創造が善なる目的をもち、その結果が善なるものであったことについては、旧約聖書を通してすでに語られているからである（創世記1章31節）。また、旧約外典の「シラクの子、イエスの知恵の書」の記事をもとに、1)「すべてのものは己の時と己の目的をもち、「すべてのものは時に己の益をもつ」こと、2)その意味は世界の全面的な肯定であること、3)この価値観がキリスト教的世界観の根底にあること、を主張する。さらにトレパチコは現代の世俗主義的志向が生まれる以前は、宗教者と哲学者の区別なく、皆が神信仰と理性的知識の結合に勤め、とりわけ後者は神による目的と秩序ある世界の創造を証明すべく活用されたと述べる。

これを嘲笑するのが、上述のメフィストフェレスの言葉であり、その秩序を無視しようとする態度の現われでもある。これによって、世俗主義的な理性は、世界に秩序ではなく、混沌あるいは矛盾を見出すのである。したがって、世俗主義とは、世界を観察する主体の態度であるとトレパチコは言う。

この主体と関わりを持つ理性についてトレパチコは、別のところでこう述べている。「理性は結論を急ぐときに、「物質的な悪は創造者の知恵と恩恵の目に見える矛盾」と映り、結局、「物質的な悪の破壊的現象には物質的特性の必然的、無目的的、無思惟的な活動以上の何物もない」ように見えているという。したがって、このような態度でものを見たときの視野は狭まり、あるいは「幻惑された」ものとなり、この視野で見たものは「真実のもの」ではなく、「幻影」であるという。

このように見てくると、世俗主義的観点は、「幻惑された視野」に基づいており、「幻影」を見ていることになる。しかしながら、トレパチコのこの議論は、キリスト教的観点に基づいている。すなわち、旧約聖書の記事を全面的に承認した上で成立しているのである。したがって、これを証明できない神話であるとみなす世俗主義的な見方からすると、説得力に欠ける。したがって、この議論は、聖書という神話に立脚して見た世俗主義ということになろう。

しかし、意味のない「内的世界」を意味のあるその観点から検討することは有意味であろう。そこで、われわれは、以上の議論から得られる幾つかの点について整理することで、終わりとしたい。

おわりに

以上述べられたことから、1)キリスト教的観点から見た世俗主義に関する議論は、「神話から見た幻影」という隠喩で表現されるような様相を呈していること、2)両者の相違点は、「信仰」の有無にあること、3)その差異は、それぞれの世界観を持つ人の精神状態に影響するこ



と、4) 現代の高度情報社会では、そこで提供される情報の量に比例してその影響力が増大していること、などが指摘できよう。すでに見てきたように、世界観の世俗化によって高度な発達を遂げた現代社会で暮らす人々は、常に、絶望や憂鬱、さらに自殺がもたらされる危険にさらされているが、これが最近の高度情報化社会では増大している。高度情報化社会は、人に休息を与えることなく情報を提供し続けるが、この情報は人によっては過度の刺激となり、精神を病む原因にもなっている。人は、己が求めるものを理解するために時間を必要とする。しかし、高度情報化社会は、そのための時間を与えず、次々に精神面に刺激を与え続けるのである。これをナウメンコは「情報による感覚の過負荷」と呼んだ。したがって、ナウメンコの議論が示したように、現代社会の問題の一つに、社会の時間と個人の時間との間の葛藤があげられよう。

また、この問題は、時間の量だけを問題にしているわけではなく、その中でものを考える人間の思考のあり方も問題にしている。上述のように、世俗主義志向とキリスト教などの宗教の相違点は「信仰」にある。これが知識獲得の際に果たす役割についてナウメンコの議論は示している。すなわち、「信仰」は知識の前提であるとともに、知識によって整理・制御され、かつ知識を整理する基準となるような性質のものであって、独善的な思い込みや感情の代替語ではないのである。

さらに、世俗主義は一つのもの考え方であるが、これが果たした役割を近代化の過程に見る時、宗教の近代化そのものが問題視されよう。近代化したキリスト教が生んだ社会のその後の状況を近代化以前のキリスト教の立場から論じたのは、こういった次第からである。

#### 主要参考文献

- Naumenko, ierej Gregorij, Pravoslavnye khristiane v veke informatsii, 《Pravoslavnaya Zhizn'》 1998.1. (doklad pročitannyj na 33-m S' ezde russoj pravoslavnoj molodezhi v Avstralii (ナウメンコ (司祭グリゴリイ)、「情報時代の正教キリスト教徒たち」、《正教生活》、1998年1月号、(第33回オーストラリア・ロシア正教青年大会で読み上げられた報告)
- Trepachko, svyashchennik Anatolij, Khristianstvo i sekularizm, 《Pravoslavnaya Zhizn'》, 1999.4. (トレパチコ (司祭アナトリー)、「キリスト教と世俗主義」、《正教生活》、1994年4月号)
- 阿部美哉、『現代宗教の反近代性 カルトと原理主義』、玉川大学出版部、1996年
- 高野雅之、『ロシア思想史 メシアニズムの系譜』、早稲田大学出版部、1989年
- ゼルノーフ・N、『ロシア正教会の歴史』(宮本憲訳)、日本基督教団出版局、1991年
- ディーラー・J、『記号学の基礎理論』(大熊昭信訳)、法政大学出版局、1998年
- ブローデル・F、『文明の文法Ⅱ』(松本雅弘訳)、みすず書房、1995年